

令和元年6月27日現在

機関番号：34414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02476

研究課題名(和文) ヴィクトリア朝文学における「火をつける女」の表象

研究課題名(英文) The representation of women and fire in the Victorian Literature

研究代表者

服部 慶子 (Hattori, Keiko)

大阪大谷大学・人間社会学部・教授

研究者番号：00469511

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』のバーサを代表として多くの英国小説に見られる「火をつける女」の表象の分析を行った。火をつけるという激烈で扇情的な行動が、プロット展開を一挙に攪乱させ読者に衝撃を与えることを解明した。常軌を逸した「火をつける女」の表象は従来分析の対象にならなかったが、この現象の英文学における意味を明らかにし、「火をつける」ことの文化史的意義にも射程を拡げて考察し、その激烈さの本質を解き明かした。また原始以来の「破壊する火」が人類の文明の発達とともに「馴致された火」に変化し、人間的温かさの象徴である「暖炉の火」に昇華する様についても論文等で明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「放火」は犯罪だが、文学作品に現れる「火をつける女性」の表象に関しては、その激烈で扇情的な行動が物語のプロットの転換点を成すことが多く、読者にも強烈な印象を与えるだけに、研究するに値する。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』に登場するバーサの分析を研究成果に発表した。狂気に陥ったバーサという女性登場人物の放火と自死は主人公ジェインとロチェスターの力関係を一挙に変更させたことを明らかにした。この研究は「火をつける」ことの破壊的力を明らかにしたが、同時に「火」を馴致し賢く利用する際「暖炉」に代表される人間同士の温かな関係を象徴するものにもなり、文化史的にも重要であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes the representation of "women committing arson" in Victorian Literature. The representative character is Bertha Mason in Charlotte Bronte's *Jane Eyre*. The shock these characters give to the plot of the novel and readers is so enormous. But the powerful impact of women characters committing arson was not analyzed. This study elucidates the meanings of these women characters and the cultural impact the act of arson has. Fire is what causes destruction, and at the same time can convert to what gives human beings culture such as hearth which symbolizes humane warmth.

研究分野：英文学

キーワード：シャーロット・ブロンテ ブランウェル・ブロンテ 火の象徴 デュ・モーリア ヴィクトリア朝文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

「火をつける女」の表象を主要登場人物の行動として描くのは、主に女性作家である。Sandra Gilbert は、“What Do Feminist Critics Want? A Postcard from the Volcano”という論文の中で、「女性作家たちは、社会文化的束縛に反応するにあたり、彼女らに共通する窮屈さや排斥、あるいは強奪を受けているという感情を表現する象徴的な物語を創造することがしばしばある」とし、火山の風景が怒りの爆発を言葉で描き出すための象徴となる点を指摘している。ただ Gilbert は本論文で『ジェイン・エア』のバーサに言及し、怒りの噴出と典型的イメージの火山との親和性にまで触れているものの、「火をつける女」というバーサの本質的表象にまでは議論を深めていない。『ジェイン・エア』の作者シャーロット・ブロンテには、精神を病んだ弟ブランウェルが自宅で失火事件を起したという経験があることは事実で、女性作家として抑圧への怒りを持ったシャーロットの想像力の中に火の恐ろしさや憤怒の噴出が重なって作品の中の最も強いエピソードに繋がったと思われる。しかし、この点も従来研究では十分論じられてきたとはいえなかった。

スコットの『アイヴァンホー』やデュ・モーリアの『レベッカ』に加えて火に纏わる重要なイギリス小説は『フランケンシュタイン』である。やはり女性作家であるメアリー・シェリーの描いた怪物は、自分の愛する家族に忌み嫌われるに至り、絶望のあまりその家族の家に火をつける。怪物の性別は男だが、女性シェリーの悲しみと怒りが投影された存在の怪物は1人の「火をつける女」でもあるとも考えられる。また、20世紀後半に出版された『ジェイン・エア』のポストコロニアル的書き直し物語であるジーン・リース作『サルガッソーの広い海』にも、バーサに相当する女性登場人物アントワネットが見た夢として、蝋燭がカーテンに燃え移り家全体が燃え上がっているらしい描写がある。夢の中でアントワネットはオウムのココの姿を幻視しているが、ココはアントワネットが少女時代に放火され、燃える自宅から火だるまになって落下したオウムであるから、社会の圧迫や差別による怒りが無意識の中で燃え上がるアントワネットの深淵を照らし出していると言えるだろう。ただ、この作品もポストコロニアル批評の枠組みの中での「転覆」の物語として解釈されているだけで、「火をつける女」への分析がないのが残念な状況であった (Spivak, *Critique of Postcolonial Reason* など)。

文化批評の分野では、火と女性の表象が分析される学術的背景はあった。「火をつけられる女」としては、中世に行われた魔女狩りと火刑が想起される。野口芳子『グリム童話と魔女』によると、グリム童話でも魔女が処刑される物語が多く、嫉妬・嫌悪・復讐心が強い女性が魔女であり、自己主張が強く、男に言い返す女は魔女として駆逐されたことが分かる。『ジェイン・エア』のジェインが鏡を見たエピソードで、彼女と一体化したバーサは「魔女」に喩えられており、焼き殺されるべき運命であることが分かる。文学作品を文化的背景の中で捉えることは重要だが、本研究のような観点で行われることはなかったので、本研究の意義は大きかったと思われる。

## 2. 研究の目的

「火をつける女」の表象はシャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』のバーサを代表として、多くの英国小説に見られる。火をつけるという激烈で扇情的な行動は、プロット展開を一挙に攪乱させ読者に衝撃を与える。スコット『アイヴァンホー』の狂女ウルリカは監禁されていた城に火を放ちバーサ同様自ら火に飛び込むし、デュ・モーリア『レベッカ』ではハウスキーパーのダンヴァーズ夫人が女主人公への憤怒から屋敷に火をつける。これ

らの常軌を逸した「火をつける女」の表象は従来分析の対象にならなかったが、この現象の英文学における意味を明らかにし、「火をつける」ことの文化史的意義にも射程を拡げて考察し、その激烈さの本質を解き明かすことを目的とした。また原始的な「破壊する火」が文明により「馴致された火」に変化し、人間的温かさの象徴である「暖炉の火」に昇華する様を考察することも重要な目的であった。

### 3. 研究の方法

本研究『ヴィクトリア朝文学における「火をつける女」の表象』では、英国近代小説における「火をつける女」表象の全体像を捉える。マイナーな小説も含めて、この表象がどれだけ行き渡っているかという研究は行われていなかった。スコット、ブロンテ、シェリー、デュ・モーリア、ジーン・リースなどの主要作品に見られる火の表象は、松本三枝子が『オーロラ・フロイド』とモダニティ』で指摘するように、マイナーなセンセイション・ノベルなどで広く活用されているだけに、他にも多数の作品で使われていると考え、網羅的研究を行った。大英図書館やオックスフォード大学図書館であるポドリアン図書館に海外出張することで、第一次資料を渉猟した。収集した資料を調査し分析することで、英国小説における「火をつける女」の表象の全体像を明らかにした。

シャーロット・ブロンテの自宅を失火させた彼女の弟ブランウェルに関してだが、実は放火が大きなエピソードとなっている『レベッカ』の作者であるデュ・モーリアはこのブランウェルの伝記を執筆している(Daphne du Maurier, *The Infernal World of Branwell Brontë*, 1960)。デュ・モーリアが「火をつける女」を描いた背景に、シャーロットとブランウェルが重要な関わりを持っていると考えた。一次資料を分析することで、ブランウェル、シャーロット、デュ・モーリアの接点を探り、「火をつける女」表象の本質に迫ることができた。ブランウェルは詩人でもあり、多数の作品を遺しているが、中に火に関係するものが多くある。本研究代表者・服部慶子は、もともとテニスやアーノルドなどのヴィクトリア朝詩を研究していたので、その経験から、ブランウェルの詩に見られる火の表象についても分析し、シンポジウム・発表、及び論文執筆を行った。

荒ぶる火は、『ジェイン・エア』のバーサにとっては破滅的だったが、結果的にジェインとロチェスターの結婚に繋がったという意味で、ジェインはある意味で火を操った、つまりその壊滅的力を馴致したといえる。またこの火は暖炉の火に変化することで、原始的火は人間同士の温かいふれあいを可能とする暖める火となる。この過程は暖炉を良き家庭の中心として礼賛したヴィクトリア朝文学に特徴的であるだけでなく、『フランケンシュタイン』に見られる天の火を盗んだプロメテウスの原始的苦悩から、近代的火の幸福への変化とも深く関係している。この大きな図式を念頭に、上記作品のみならずヴィクトリア朝文学広範に渡る網羅的研究を行うことで、文学史的展望がもたらされると考え、研究を行った。

### 4. 研究成果

研究代表者は、マリアン・トールマレン著『歴史のなかのブロンテ』(大阪教育図書刊、2016)を共訳として出版した。その中の「哲学的・知的背景」(pp.279-288)を翻訳した。翻訳ではあるが、本研究と密接に関連する学術的文献に関して、内容を吟味し著者の思想を解釈しながらの翻訳作業であったため、本科研の研究を進める上での基礎を形成する上で、大いに役立った。

論文「火の力と女性 火に喩えられる文学作品の女性たち」(pp.151-160)を『志学』(大阪大谷大学、2016)を発売した。「火をつける女性」に関する中心的な研究成果である。また、本研究の成果論文として「ブランウェル・ブロンテにおける火の表象」(『大阪大谷大学紀要第 52 号』pp.69-84、2018)を発売した。この論文では火の表象が男性であるブランウェル・ブロンテにも見られることを議論しており、本研究のテーマの広がりを捉えることができた。

論文「ブランウェル・ブロンテにおける火の表象」の準備段階として、以下の口頭発表での成果がある。ブランウェル・ブロンテは従来あまり取り上げられることがなかったが、研究代表者はブロンテ協会関西支部支部長として、ブランウェルの重要性を会員たちと議論する中で、このブロンテ姉弟の中でマイナーな存在として考えられていたブランウェルに関するシンポジウムをブロンテ協会全国大会で行うことが決まった。研究代表者はこのシンポジウムで司会兼講師を務めた。シンポジウムのタイトルは「ブランウェルの人と芸術」で、2017年10月14日に中央大学多摩キャンパスで開催された。研究代表者は司会を務め、また発表「ブランウェルの微かな命の灯」を行った。これにより、ブランウェルを再考察する機運が高まり、大きな啓蒙活動になった。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 服部慶子、「国家と生殖の未来 二つの夢を検証するー」、『大阪大谷大学紀要』第 53 号、2019 年、151 - 162 ページ 機関リポジトリ <http://id.nii.ac.jp/1200/00000276/>
2. 服部慶子、【書評】スー・ロノフ編 中岡洋ノ葦澤久江訳『ブロンテ姉妹エッセイ全集【ベルジャン・エッセイズ】』の書評、掲載雑誌『ブロンテ・スタディーズ』6(4)、2018 年、153 - 157 ページ
3. 服部慶子、「ブランウェル・ブロンテにおける火の表象」、『大阪大谷大学紀要』第 52 号、2018 年、69 - 84 ページ 機関リポジトリ <http://id.nii.ac.jp/1200/00000218/>
4. 服部慶子、「火の力と女性 火に喩えられる文学作品の女性たち」、『志学』、2016 年、151-160 ページ

〔学会発表〕(計2件)

1. 服部慶子、シンポジウム「ブランウェルの人と芸術」司会兼講師、発表タイトル「ブランウェルの微かな命の灯」、2017年10月14日、於：中央大学多摩キャンパス
2. 服部慶子、「英文学における『火をつける女性』たち」、大阪大谷大学公開講座、2016年9月24日、於：大阪大谷大学ハルカスキャンパス

〔図書〕(計1件)

【共訳】マリアン・トールマレン著『歴史のなかのブロンテ』、2016年、279-288 ページ、大阪教育図書

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：服部典之

ローマ字氏名：Noriyuki Hattori

所属研究機関名：大阪大学

部局名：文学研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：50172937

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。